

# よもやまばなし

中西卓



四方山とも書きますが、この歳まで山と関わってきた私の話にお付き合いいただければ幸いです。

・初めに **mono** 君との思い出を話したい。二つとも高校1年でのこと。

**伊吹山**：深夜の鈍行に乗って麓の近江長岡に着く、薄明りの街中を抜けて山道にかかる頃には明るくなっていた。頂上では何人かの登山者がいたが、晴れて可愛い草花の楽園だったと思う。東海道線の車窓から見るとおりずんぐりした裸の山、辞書によれば「海拔 1377m、全山石灰岩で薬草や高山植物に富む」とある。京阪神と名古屋から交通至便で楽に登ることができ、冬はスキーもできる身近な山である。今、頭の中にある地図では、琵琶湖と鈴鹿の山を近くに眺め、関ヶ原の古戦場も近い筈である。信長や秀吉との因縁もあったと思う。セメント企業が何十年も山を削って段々に姿が変わっていくのが気かりである。

**赤目四十八滝**：二人は何も持たずに、ふらりと電車に乗ったが、何を思って出かけたのか思い出せない。地図・コンパスを持たず、半袖上着の通学姿で山道に分け入ったが、日が傾いてもさほど心配しなかった。やがて、とっぴり暮れてどこをどっち向いて歩いているのか足下が不安になったが、どうしようもない。無暗に歩いてもと思って二人は肩を並べて道端に座り込んだ。疲れて少しは眠っただろうが、暗闇が白けてくると不安が解消した。何のことはない四十八滝の最奥に来ていたのだ。滝壺に嵌らずにすんだのが幸いだった。

・続いては、**マッターホルン**に纏わる話。33年前リフレッシュ休暇の旅でツェルマットに3泊したが、この宿が Seilerhotels **MONTEROSA** だった。表通りに面した壁にウィンパーのレリーフを掲げ、ロビーにエリザベス I 世女王の由緒と並んでウィンパーがマッターホルンに初登頂したときの宿であると誇らしげに展示してあった。山の古典ウィンパーの「アルプス登攀記」を後追いで読んで、改めて満足したのであった。

今 TV で見るアルプスの旅では、マッターホルンが人気でヘルンリホテル（肩の小屋）の快適さとガイド付きの登山に今昔の感だが、天候或いは自身の能力・体調次第でそんなに甘くはないだろうと思う。「登攀記」を読んでつくづく思うのは、ピッケルを使いザイルを結ぶ山男でなければ氷河や岩登りの話が延々と続くのはかなり退屈だが、画家のウィンパーによる達者な挿絵を見ながらの読書が救われると言っておきたい。

私はマッターホルンを遠くはスネガからのハイキングで、近くはグレイシャーパラダイス（クラインマッターホルン）から何れも概ね北側から望んだが、山頂に載る黒っぽい家のファサードに、悪魔が宿るのを感じたが見る者の心境によるのだろうか、怖い印象が今も残っている。かつて **mono** 君の年賀状に、朝日を浴びて輝く北壁があったが怖い山のイメージは全くなかった。山は見方でこんなに変わるのだろうか。

・**大峰の奥駆け**：50代半ばに親しい友達3人と凡そ40kmの修験道を踏破した。アルプスのような緑と白で彩られた目の慰みがなく、延々と続く険しい尾根道は安らぎがない。深田久弥の日本百名山によれば、平安時代に22歳の役ノ小角が大峰山で苦行したのが開山とある。自分も山伏修行をしたはずだが、夜明けから日暮れまでの強行軍がきつかった思いだけが残る。山上ヶ岳、大普賢岳、行者還岳、弥山、仏生岳、釈迦ヶ岳を途中3泊で歩き、太古の辻で縦走路を離れて終点の前鬼に辿り着く。帰途にバスを上北山村で途中下車して温泉で汗を流した3人が無事を喜びあったのが何よりだった。

・**遍路転がし**：80を越える前に四国遍路を始めたが、体力の衰えを思い知る結果に終わった。一番の霊山寺で白装束に菅笠、金剛杖、朱印帳などを整えて遍路を始めた。お大師さんと同行というが一人歩きは自分だけ、父方先祖のルーツが吉野川の中流域なので、ただの他所者ではない。早速沿道のお接待に与かったのも嬉しくて、阿波の春

を楽しみながら歩いたが、三番、四番と打つうちに歩き方の遅いことがわかってきた。宿の予約が六番安楽寺のため日が暮れるまでに着かなければと思っても足が重くて道端の石垣で一服していたら、自転車で通りかかった女性が止まって「ここで少し待っていなさい」と言う。10分もせずに車が来てお寺まで送ってくださった、こんな有難いお接待もあるんだと、有難く感謝した。翌日は十番切幡寺を経て吉野川を渡り、川島から JR で岡山へその日のうちに帰宅した。

9月になってその続きを十一番藤井寺から十二番焼山寺へ、歩き遍路で最も厳しいところで「遍路転がし」と呼ばれ、平面距離は16kmでも途中に深い上下があるから厳しい修行だ。麓の宿と山上の宿坊で泊まればの積りが全くの考え違いだった、30年前には「柳水庵」なる無人小屋を利用できたが固く閉ざされたまま。軽装の若者？が何人も追い越して行くのを見て自らの至らなさを思い知った。柳水庵周辺は昔も今も道の駅らしく数体の地藏尊と赤い幟が立つ「辻」であるが、ここで踵を返した。



**岡山**の山：北は県境に1000m前後の山が連なっていて方々歩いた。県南は300m前後が点在するが、熊山508mは山頂に古来の遺跡があり海側の展望が開けて登山者が多い。家から近いが20余年前に数回登ったあとご無沙汰している。この10年、山へは元旦に初日を拜むために団地東端の磐山190mへ標高差100mをノルディック杖をつけて登るだけである。20人近くの多くが顔見知りで、高齢者の健康を祝ってくれるのが嬉しい。

#### おわりに：

北の大雪山から南の宮之浦岳まで 深田久弥・日本百名山の28にしかならないが、それぞれの山だけでなく、先に逝った山仲間を思いうかべながら拙い文章を閉じる。先月の海、今回の山、ともに季節に相応しいテーマをいただいたことにお礼申したい。残念なのは、HD や DVD の写真が探し出せないこと、生来のズボラとのノロマが未だに治らない。

(終)

**補遺** 去る8/28のオンライン席上紹介した“マッターホルン最前線”を再掲します。わざわざと思われるかもしれませんが、“アルプス登攀記”が山岳書の古典で昔話なら、本書は現代・最前線の活きた物語です。著者はヘルンリ小屋（ホテル）の管理トップの仕事の傍ら現地救急隊リーダーも務める。妻と8歳の息子と3人で登頂、自らの最年少記録を書き変えた話も。ヒマラヤのシェルパがマッターホルンの険しさに尻込みしたのは意外でした。



170人収容のホテルが天候次第で多忙と閑の両極に振り回される、宿泊しないキャンプ登山者の行動にも目が離せない。へりで遭難現場に駆け付け、自らも宙づりになって救出する、遺体を袋に詰めて収容するやりたくないことも出てきます。

山に少しでも興味ある方に、今人気最高のマッターホルン を手に取るように案内してくれます。ご一読を。